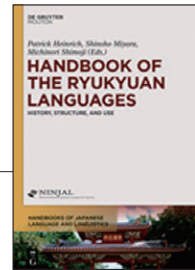


## 国立国語研究所学術情報リポジトリ

〈著書紹介〉 Handbooks of Japanese Language and Linguistics 11 Handbook of the Ryukyuan Languages: History, Structure, and Use Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下地, 理則 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000787">https://doi.org/10.15084/00000787</a>

Handbooks of Japanese Language and Linguistics 11  
***Handbook of the Ryukyuan Languages  
History, Structure, and Use***  
**Patrick Heinrich, Shinsho Miyara, Michinori Shimoji (eds.)**  
Masayoshi Shibatani, Taro Kageyama (series editors)  
De Gruyter Mouton, January 2015. lxxvii, 723 pages.



## 下地 理則

### 1. この本の出版経緯

本書は、国立国語研究所と De Gruyter Mouton 社の学術協定に基づくシリーズ企画 HANDBOOKS OF JAPANESE LANGUAGE AND LINGUISTICS (HJLL) の第 11 巻である。HJLL は、日本語および日本語言語学の研究の最前線を紹介する英文ハンドブック集であるが、本書は其中でも琉球諸語研究の最新の研究動向・研究成果を世界に向けて発信する趣旨で編集された。編者はベネツィア大学のパトリック・ハインリッヒ氏、琉球大学名誉教授の宮良信詳氏、九州大学／国語研の下地理則（筆者）の 3 人である。

### 2. この本の構成と内容

琉球諸語の研究の歴史は長いですが、本書はその研究史を概観しつつ、今後の展望までを視野にいれており、琉球諸語研究の「過去」と「未来」をつなぐ役割を担っているといえる。英語で書かれているため、これまであまり知られることがなかった琉球諸語の言語学的・言語社会学的諸特徴・諸問題について、海外の研究者の関心をひくきっかけになるとと思われる。

本書は、次のような 6 部構成になっている。以下に、それぞれの部について簡単な解説を加える。

- Part I Overview
- Part II Linguistic features
- Part III Grammars of individual languages
- Part IV Sociolinguistics
- Part V Sociology of language
- Part VI Bibliography

琉球諸語の歴史的側面を扱う Part I では、祖語の再建に直接にかかわる比較言語学的な議論にとどまらず、人類学的・考古学的議論も紹介されており、また文献学的な研究も扱われ、琉球諸語の歴史に関する便利な概説になっている。Part II と Part III は共時的な体系を描く諸研究を集めているが、このうち Part II はトピックごとに、Part III は言語ごとに整理されている。特に Part III は、消滅危機言語研究としての琉球諸語研究という位置づけであり、

南北6地点(奄美大島・沖永良部島・沖繩本島・多良間島・波照間島・与那国島)の個別方言の文法記述(文法スケッチ)を収録している。記述にあたっては、特定の分野に偏らないよう、音韻から統語までの網羅的な記述を目指した共通の構成にできるだけ従って書くように工夫されている。これら6言語のうち、沖繩本島の首里語を除くすべての言語は琉球諸語研究ではあまり取り上げられてきておらず、その意味で、本書のPart IIIは消滅危機言語の記録保存に寄与する貴重な成果であるとともに、琉球諸語の記述研究を進展させる重要な意味をもっている。Part IVとPart Vは、社会言語学的・言語社会学的側面から琉球諸語を扱った論考を収録している。琉球諸語の危機については、これまでの琉球諸語研究においては記述言語学的研究を行う個々の研究者が共有する「危機感」として個別に議論されていたように思われるが、本書では国内外の社会言語学・言語社会学の専門家が、理論的枠組みをベースにしたうえで体系的に議論している点が特徴的である。Part VIは、琉球諸語研究の研究史一覧に概説を加えた文献リストであり、これまでの琉球諸語研究の歩みを知るうえで便利な一章となっている。

本書は、琉球諸語の専門家のみならず、これから琉球諸語を研究することを考えている国内外の研究者・学生、日本語を研究対象とするすべての研究者、さらには琉球諸語に関心を抱きつつもこれまで言語の壁によってその関心を阻まれていた海外の研究者に大きく門戸を開くものである。

## 下地 理則 (しもじ・みちのり)

九州大学大学院人文科学研究院准教授。Ph.D.(言語学)(Australian National University)。群馬県立女子大学専任講師を経て、2012年4月より現職。2011年4月より国立国語研究所時空間変異研究系客員准教授。

主な著書・論文:『琉球諸語の保持を目指して』(編著, ココ出版, 2014), *An introduction to Ryukyuan languages* (編著, ILCAA, 2010), 「琉球諸方言における有標主格と分裂自動詞性」(『方言の研究』1, 2015), The adjective class in Irapu Ryukyuan (『日本語の研究』5(3), 2009), Foot and rhythmic structure in Irapu Ryukyuan (『言語研究』135, 2009)。

受賞: 仲宗根政善記念研究奨励賞(沖繩言語研究センター, 2009)。

社会活動: 日本言語学会夏期講座委員, 法政大学沖繩文化研究所国内研究員, 沖繩言語研究センター運営委員。